

## 『源氏物語』における儒教・仏教・道教の思想 —第一部を中心にして—

陳明姿\*

### 要旨

儒教・仏教・道教の思想は古くから日中両国が頻繁に交流していたもとで日本に伝わった。平安時代に至ると、儒教・仏教・道教の思想は更に貴族社会の日常的時空に深く浸透し、当時の文学に影響を与えるようになった。『源氏物語』もその一つである。紫式部は『源氏物語』を書くに際して、どのように儒教・仏教・道教の思想をとり入れ、且どういう効果を収めたのか、興味深いことである。小稿では、『源氏物語』における儒教・仏教・道教の思想を考察する一環として、特に第一部に焦点をあて、儒教・仏教・道教の思想は『源氏物語』の空間造形、人物造形を描くに際して、どのような役割を果たすのかを考察する試みである。

キーワード：儒教 仏教 道教 宿世 空間造形 人物造形

---

\*台湾大学日本語文学科 教授

## 《源氏物語》與儒佛道思想 —以第一部為主—

陳明姿\*

### 摘要

儒佛道思想自古便在中日兩國頻繁的交流之下傳至日本，至平安時代時，儒佛道思想已深及當時貴族社會的日常時空，並影響及文學。《源氏物語》也是當中之。紫式部在撰寫《源氏物語》之際，如何擷取儒佛道的思想，又達到何種成就，是一饒富趣味的問題。拙稿為考察《源氏物語》裡的儒佛道思想，特別聚焦於第一部，探討儒佛道思想在《源氏物語》的空間造型、人物造型具何種功效。

關鍵字：儒教 佛教 道教 宿世 空間造型 人物造型

---

\*台灣大學日本語文學系 教授

**The Tale of Genji and the Thoughts of Confucianism, Buddhism  
and Taoism—based on the first part—**

Chen Ming-tsu \*

**Abstract**

Because of the frequent communication between China and Japan, the thoughts of Confucianism, Buddhism and Taoism had spread to Japan since ancient time and have soaked into the daily lives of the aristocrats in the Heian period. The works of literature then also show the traces of the thoughts of Confucianism, Buddhism and Taoism, and *The Tale of Genji* is one of them. It is a question worth discussion to find out how Lady Murasaki Shikibu picked the thoughts of Confucianism, Buddhism and Taoism and what she achieved by doing so while writing *The Tale of Genji*. For research on the thoughts of Confucianism, Buddhism and Taoism of *The Tale of Genji*, the thesis especially focuses on the first part of *The Tale of Genji* to discuss how the thoughts of Confucianism, Buddhism and Taoism acted on the *kuukanzoukei* and *jinbutuzoukei* of *The Tale of Genji*.

**Key words:** Confucianism, Buddhism, Taoism, *sukusei*  
the design of space, the design of characters

---

\* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

## 『源氏物語』における儒教・仏教・道教の思想 —第一部を中心にして—

陳明姿

### 1. 序

日本は古くから中国との交流を行っている。江戸時代に福岡市の志賀島から「漢委奴国王」と刻まれた金印が発見されたが、それは紀元 57 年に後漢の光武帝から下賜されたものと言われる。また、『三国志』の「魏志倭人伝」には、紀元 239 年、魏の皇帝が邪馬台国の卑弥呼に「親魏倭王」の呼称と金印、銅鏡などを与えたとある。『宋書』の倭国伝にも 5 世紀に倭の五王が相次いで南朝に遣使したことが記されている。次いで、7 世紀から 9 世紀の終わり頃まで、さらに多くの遣隋使、遣唐使が派遣された。こういった交流のもとで、中国から多くの文物、制度、書籍などが日本に伝来することになる。

『論語』『千字文』などの儒教関係の書籍や『老子』『莊子』『山海経』『列子』『抱朴子』『淮南子』などの道教関係の書籍はもとより、インドや西域から中国に伝わった仏教関係の書物も朝鮮半島経由か、あるいは海路から日本に伝えられた。そして、これらの書籍の内容および思想は当時の日本の漢文学ばかりでなく、後の和文学にも大きな影響を与えることになるのである。和文学の代表作の一つで、以後の日本文学に非常に大きな影響を与えた『源氏物語』も、もちろん例外ではない。拙稿は、特に源氏の誕生からさまざまな恋愛を経て、準太上天皇という栄耀栄華の極みに至るまでの過程を描く第一部（桐壺の巻から藤裏葉の巻まで）に焦点をあて、この部分において儒教と仏教、それに道教の思想がそれぞれどのような筋の展開の中でどのように取り入れられ、又、それによってどのような効果を収めたのかを考察しようとする試みである。

### 2.

平安朝は仏教がたいへん盛んな時期である。そのため、平安朝を

背景に描かれた『源氏物語』にも仏教思想の影が色濃く落ちている。例えば、男女の婚姻や人の運命はすべて「宿世」によって定められたと考えられている。特に、肉親や愛する人を失った者の悲嘆を語る展開においては、かならず「宿世」論が導入されると言うてよく、首巻の桐壺の巻からその例を見ることができる。桐壺更衣が亡くなった後、帝に遣わされて、鞍負の命婦が更衣の母君を見舞いに行く。そこで命婦は更衣の母君の愚痴を聞いた後、次のように語るのである。

命婦「上もしかなん。『我御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになん。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、たゞこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人のうらみを負ひしはてはては、かううち棄てられて、心をさめむ方なきに、いとど人わろうかたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ』とうち返しつつ、御しほたれがちにのみをはします」と語りて尽きせず。<sup>1</sup> (『源氏物語』(1) p. 107)

更衣が亡くなってから、帝と更衣の母君の二人はともに悲涙に沈んでいる。命婦の来訪は、更衣の母君をなぐさめるばかりではなく、帝の心情を伝えるためでもあった。帝もまた被害者であり、帝がこんなにも激しく更衣に対して愛執を持ち、ついに無残にも更衣を死に至らしめたのは前世の因縁によるものであることを命婦は更衣の母君に伝えようとしているのである。

この「前の世」の用例は、この場面以前にも現れている。最初は光源氏の誕生を語る部分である。

前の世にも、御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男皇子さへ生まれたまひぬ。(『源氏物語』(1) p. 94)

桐壺帝と更衣との間に皇子までできたのは前世の深い契りによる

<sup>1</sup> 本文の引用及び章段、ページ数の表示は、すべて阿部秋生他校注の『源氏物語』(一)～(六) (『日本古典文学全集』東京；小学館 昭和54年～56年) に拠る。

とされ、二人の出会いから死別までが、すべて不可視、不可知の宿世によって定められていたというのである。おそらく作者には、帝がこのように苦しく寂しい状況に陥ったのは、すべて前世の因縁によるものだとことさらに強調する意図があったのだろう。以上の二回の他に、更衣を失った後、帝が悲嘆に暮れる場面にも、さらに前世の因縁への言及がある。

朝に起きさせたまふとても、明くるも知らで、と思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり。(中略) すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつつ嘆く。さるべき契りこそはおはしましけめ。(後略) (『源氏物語』(1) p.112~113)

「さるべき契りこそはおはしましけめ」とあるように、ここでも、更衣と早く死別して、帝が愁嘆の日々を送らなければならないのは、宿縁によるものと語られているのである。

又、夕顔の巻においては、夕顔を失った源氏が「かかるべき契りにこそはものしたまひけめと、思ふもあはれになむ」と悲しんでいる。愛する人を失うことによって孤独感、喪失感を噛み締めさせられるのは、すべて前世の因縁だと語られるのである。このような因縁による運命解釈は作品中に少なくない。なぜ今世でこのような不幸に遭ったのか。人間の知識では、それを合理的に解釈することが出来ない。そのため、当時、盛行していた仏教の因果応報説にもとづいて、先の世の行いによって受ける報いだという解釈が与えられるのである。もちろん、われわれは前世でいったいどんな種を播いたのか、知るよしもなく、そのため、今世でどんな運命が待っているのかも予測できない。よって、宿世は人間にとって不可視、不可知であるばかりでなく、逃れがたいものとなる。その意味で、「源氏物語において、宿世一般が論じられる場合、その捉えがたさと抗いがたさが特に強調される」<sup>2</sup>とする佐藤勢紀子の指摘は首肯できる。

<sup>2</sup> 佐藤勢紀子「源氏物語の宿世観」(『源氏物語講座』5『時代と習俗』 東京:

しかし、宿世はかならずしも悪運・悲運の際にだけ感知されるとは限らない。時には、人間の才能、外形、又は幸運などのプラスの面においても使われる。主人公源氏についてもいくつかそういう例が見られる。たとえば、賢木の巻の中で、人々が夏の雨の退屈しのぎに韻塞ぎの競争を行った時、源氏の才能が次のように讃えられている。

塞ぎもてゆくままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどのまどふ所どころを、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。「いかでかうしも足らひたまひけん。なほさるべきにて、よろづのこと、人にすぐれたまへるなりけり」とめできこゆ。（『源氏物語』（2）p.132～133）

即ち、源氏は容色にすぐれているばかりでなく、学才もずば抜けていて、世評の高い博士でさえ彼に及ばない、彼がこんなに万事何もかも人よりすぐれているのは、やはり前世からの果報だと賛嘆しているのである。及ぶ者のない源氏の才能を強調するために宿世が必要とされたと言いうことができるだろう。

一方、仏教は前世、来世との関係においてばかりでなく、人々の今世の幸福とも関わっている。平安朝では長谷寺など靈驗あらたかな観音菩薩に参詣して、願望を成就する話が多く伝えられているが、作品中の玉鬘でも長谷寺への参詣が語られている。夕顔がすでに亡くなっているため、玉鬘は自分の母親に会うことは叶わない。だが、彼女は源氏に引き取られ、良縁に恵まれて、幸せな人生を送ることができる。そして、それは長谷寺観音菩薩の庇護があったためであろうことが匂わされているのである。作中人物の日常生活が仏教思想と非常に深くかかわっていることの一端をここから伺うことができよう。

仏教のほかに、陰陽道も平安貴族の日常生活で重要な役割を果たしている。そのため、『源氏物語』においても、「方違」「物忌」「禊」、

吉日の選択などのことがらがよく語られる。たとえば、帚木の巻では、長雨が続き、晴れ間の見えない時に、「内裏」で「御物忌」が引き続き行われ、源氏は「中神、内裏よりは塞が」るため、違う方角にある紀伊守邸へ「方違」に行かなければならないことが語られている。又、夕顔の巻には、夕顔の遺骸を東山に送って京へ帰ってから重く患った源氏のために、まわりの人々が「御祈祷方々に隙なくののしる。祭祓修法など言ひつくすべくもあらず」とある。そのほか、何事を行うときでも、なるべく吉日が選ばれ、凶日は避けられている。たとえば、葵の巻では、源氏と紫の上が新枕をかわした後、慣例によって、三日夜の餅を紫の上に差し上げようとする。その時、源氏は惟光に「明日の暮に参らせよ。今日はいまいましき日なりけり」と言う。惟光もそれを察して、「げに、愛敬のはじめは日選りして聞こしめすべきことにこそ。さても子の子はいくつか仕うまつらすべうはべらむ」と返事をするのである。このように結婚などのめでたいことで吉日を選ぶのは当然のこととも言えようが、当時は葬儀などでも日柄を選んでいる。夕顔の巻で、夕顔のため葬儀を行う時、惟光が源氏に「明日なん日よろしくはべれば」と言ったことなどがその例である。又、髪を削ぐなどのことをするにも吉日が選ばれる。たとえば、葵の巻で、源氏は紫の上の髪を削がせる時に「久しう削ぎたまはざめるを、今日はよき日ならむかし」と言うのである。こういった凶を避け、吉を招こうとする例は実に多く見られる。そして、このような陰陽道の思想とその儀式作法は実は道教から来ているのである。福永光司によると、陰陽道は、『易経』の「一陰一陽の道」としての陰陽道が『老子』、『莊子』の思想と折衷されて、これに漢代の陰陽五行の自然哲学、天文、律暦の数術の学が結合し、さらに天人合一説、分野説、五緯を中心とする占星術、十干十二支の呪術信仰などが抱き合わされて、成立したという<sup>3</sup>。実際、陰陽道でよく行われるこれらのことはすべて、道教においても、万

<sup>3</sup> 福永光司他著『日本の道教遺跡を歩く—陰陽道・修験道のルーツもここにあった』（東京：朝日新聞社 2003年10月）p. 280～289

事順暢、無病息災を祈るためによく行われる儀式作法である。道教思想もまた、作品の日常の時空間で大きな役割を果たしていることは明らかだろう。

さらに、儒教思想も平安時代の社会制度に影響を与え、人々の言行の規範としての役割を果たしており、当然『源氏物語』にも取り入れられている。その代表的なものは、儒教の中でもっとも重視される「孝」の徳であろう<sup>4</sup>。まず、理想的な人物源氏は、言うまでもなく「孝子」として造形されている。たとえば、桐壺帝が崩御した時の源氏は誰にもまして「ものも思わしわかれず」、また、「後々の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへる」と語られ、源氏の桐壺の帝に対する孝の思いは、どの兄弟よりも深いことが強調されるのである。一方、冷泉帝も源氏が自分の実父だとわかった時、源氏に帝位を譲ろうとする。源氏に止められはするが、その後もできる限り、源氏に子として孝養を尽くそうとしている。源氏を準太上天皇にしたのもそのためである。

又、女性の言行の規範となる三従の徳も取り上げられている。藤袴の巻で、源氏が夕霧に養女玉鬘の結婚について聞かれた時、次のように答えているのである。

「方々いと似げなきことかな。なほ、宮仕をも何ごとをも、御心ゆるして、かくなんと思されんさまにぞ従ふべき。女は三つに従ふものにこそあなれど、ついでを違へて、おのが心に任せんことは、あるまじきことなり」(『源氏物語』(3) p. 328～329)

三従の徳は古代中国の女性がかならず守らなければならないと教えられた徳である。『礼記』には「婦人従人者也，幼従父兄，嫁従夫死従子」<sup>5</sup>とあり、『儀礼』にも「婦人有三従之義，無専用之道，故

<sup>4</sup> 『孝経』「開宗明義」章（魏何晏等注 宋邢昺等疏 張文彬等分段標貼『十三經注疏』19 台北：新文豐出版工司 2001年）p19

<sup>5</sup> 阮元校勘『十三經注疏附校堪記』『禮記』（台北：大化書局 1982年）p. 1456

未嫁従父，既嫁従夫，夫死従子」<sup>6</sup>と記され、『大戴禮』の中にも「婦人伏於人也。是故無專制之義，有三従之道。在家従父。適人従夫，夫死従子，無所敢自遂也。」<sup>7</sup>との記述がある。古代中国の女性はいかなる場合にも、自分の主張を持つことは許されず、この道德規範を守らなければならなかった。このような女性に対する儒教規範も、平安時代に至ると、貴族社会に浸透し、『源氏物語』の中にこのような言葉が現れるようになったのである。

以上の考察から明らかなように、『源氏物語』の第一部の日常の時空間において、仏教・道教・儒教の思想は深く人々の生活に関わっていると言いうことができよう。

### 3.

仏教・道教・儒教の思想は、『源氏物語』の第一部の中で、しばしば日常生活の時空に現れるばかりでなく、さらに重要なモチーフや人物などの造形において主要な役割を果たしている。たとえば、作品の中のいくつかの理想境的時空は、殆ど神仙的色彩を帯びている。

まず源氏が自分の思う通りに作り上げた理想的な世界——六条院に目を向けてみよう。少女の巻では、源氏三十五歳の八月に六条院が落成したことが語られる。

八月にぞ、六条院造りはてて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御旧宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。(『源氏物語』(2) p.72)

六条院は源氏、紫の上、梅壺中宮など、もっとも雅趣を解する人々

<sup>6</sup> 注五同掲書 p1106

<sup>7</sup> 王雲五編『韓詩外傳 經典釋文 大戴禮記 方言春秋繁露 釋名』『大戴禮記本命』(『四部叢刊』003 台北：台灣商務印書館 1979年11月) p.69

の思案によって作られた世界であり、優雅な趣が溢れるところであろうことは想像に難くない。また、六条院は四つの町にわかれている。それぞれに紫の上、花散里、梅壺中宮、明石の君に住まわせるため、四つの町はそこに住む人物の希望に副うような風情が添えられ、四季折々の植物が植えつけられている。そのため、六条院は季節の推移によって、折々の変化に富んだ風光を享受できる理想境的な場所である。そして、作者は六条院を理想境として語るに際して、中国の仙境をも念頭においたらしく、明石の君の住まいになる西北の町に植えた植物の中には「をさをさ名も知らぬ深山木ども」も含まれる。これは中国の神仙伝の中によく見られる「奇珍異木」(『柳毅伝』)「奇果異樹」(『西京雜記』)などを思い起こさせる。六条院は仙境的な趣をも漂わせているのである。

この六条院についての語りは、少女の巻だけでなく、胡蝶の巻でも続いて行われる。紫の上は秋好中宮が秋に贈ってきた知的な挑発に酬いるために、翌春、春の町で盛大な惜春行事を行い、さらに間接的に春の美しさを中宮に知らせようとして、中宮付きの若い女房を船遊びに招待する。

龍頭鷓首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、楫とりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に来たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。(『源氏物語』(3) p. 158)

「龍頭鷓首」の船を浮かべ、船樂を催すというのは『淮南子』の「龍頭鷓首 浮吹以娛」を想起させるし、また、唐一色の舟に乗る女房が「まことの知らぬ国に来たらむ心地す」という「知らぬ国」は紛れもなく中国のことである。この六条院の春の美景を語る時、作者はたえず中国の仙境のことを意識していたらしく、その後にも「まことに斧の柄も朽いつべう思ひつつ、日を暮らす。」と語られている。この部分が王質爛柯の故事と劉阮天台の故事を踏まえた大江朝綱の『本朝文粹』巻十収載の詩序の中にある「臣謬入仙家。雖為

半日之客 恐帰旧里 纔逢七世之孫」の影響を受けたことは、田中幹子によって指摘されている。ただし、この二つの故事の特に王質爛柯の方は、平安朝文学全般に影響を及ぼしているため、かならずしも朝綱の詩序から影響を受けたとは言いがたいという修正がすでに田中隆昭によってなされており<sup>8</sup>、式部のこの文が直接どこに依拠したかははっきりしない。だが、いずれにしても、六条院を仙境に擬して語ろうとする意図は強く窺うことができよう。

この王質爛柯の故事は、式部の脳裏にかなり深く刻まれていたのか、これも理想境的趣が漂う桂の院を語るときにも、この故事が取り入れられている。桂の院が語られる松風の巻に目を移してみよう。この巻では明石の君たちが明石入道の手配によって大堰に移ったことを知った源氏が、桂の院への用事にかこつけて、明石の君たちに会いにいこうとする。

「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来ゐて待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御とぶらひすべければ、二三日ははべりなん」(『源氏物語』(2) p. 399)

もちろんそれは明石の君たちに会うのが目的だったが、源氏は紫の上に気兼ねして、明石の君のことを隠して桂の院へ行くと言ったのである。しかし、紫の上は源氏が最近、にわかには桂の院を作らせたのは明石の君を迎えるためだと思っている。それゆえ、源氏が明石の君に会いに行こうとしていることを推察した紫の上は、不満そうに、「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」(『源氏物語』(2) p. 399) と返事をしないではいられない。つまり、源氏は二三日だと言っているが、そこへ行くと、楽しくて、帰ることさえ忘れるのではないかと皮肉を言っているのである。源氏と紫の上の間で交わされた対話は、王質爛柯の故事はもちろんだが、その他に『西

<sup>8</sup> 田中隆昭「仙境としての六条院」(『国語と国文学』 東京大学国語国文学会平成十年十一月特集号) を参照 p94

陽雜俎』の「月中有桂」の神仙伝説をも踏まえているように思う。

『酉陽雜俎』には、次のような人口に膾炙した伝説がある。

舊言月中有桂有蟾蜍故異書言，月桂高五百丈，下有一人常斫之。樹創隨合，人姓吳剛、西河人、學仙有過，令伐樹。釋氏書言，須彌山南面，有閻扶樹月過樹影入月中或言月中蟾桂地影也空處水影也此言差近。（『酉陽雜俎』卷一、九）<sup>9</sup>

即ち、桂はもともと仙境の中のものだとされているのである。式部はここで桂にまつわる伝説と王質爛柯の故事とをうまく融合させ、仙界とも言うべき桂の院へ行くと、あまりの楽しさに「斧の柄さへあらため」るほど長く滞在するだろうという気の利いた文句を紫の上に言わせていると見てよかろう。

藤原佐世の『日本国見在書目録』によると、この『酉陽雜俎』は平安時代に既に伝わっており<sup>10</sup>、六朝と唐の詩の中にも「月桂」や「桂月」の言葉がよく出てきている。それゆえ、平安時代の教養人は「月中有桂」の伝説をよく知っていたはずであろう。

「月中有桂」を踏まえているのはこの部分だけではなく、同じ松風の巻における冷泉帝と源氏との歌の贈答にも見られる。

源氏が頭中将と桂の院で月見をしながら管絃の合奏を行っていると、四五人の殿上人が訪ねて来る。彼らは

「月のすむ川のをちなる里なればかつらのかげはのどけかるらむうらやましよう」（『源氏物語』（2）p. 409）

という冷泉帝からの文を持ってきたのであった。

源氏は本来冷泉帝の実父であるが、この時、冷泉帝はまだそのことを知らない。だが、何となく源氏を慕っており、管絃の御遊びのような時も、源氏がいないと、寂しく、もの足りなく感じるため、使いにこの和歌を源氏に送らせたのである。月の中に川と桂がある

<sup>9</sup> 『酉陽雜俎』（『中国史学叢書統編』35 『酉陽雜俎 諸蕃誌 島夷誌略 海槎餘録』 台北：学生書局 1979年）p. 12

<sup>10</sup> 『酉陽雜俎』は藤原佐世編集の『日本国見在書目録』の中にも収録されている。（台北：新文豊出版社 1984年6月）

ということは古くから語り伝えられている。『酉陽雜俎』だけでなく、『源氏物語』の古注釈書『河海抄』にもそのことについての記述がある<sup>11</sup>。この和歌もそのような「月中有桂」の伝説を踏まえて、「月」「川」「かつら」「かげ」などの言葉を取り入れて詠まれたものであろう。そして、この和歌を見た源氏も、冷泉帝が「月中有桂」の仙境説話を踏まえて、自分の「うらやまし」い気持ちを詠んでいることを察する。そこで同じく「月中有桂」を意識して、

久かたのひかりに近き名のみしてあさゆふ霧も晴れぬ山里  
行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし。(『源氏物語』(2)  
p. 410)

という和歌を贈って冷泉帝の行幸を勧めるのである。これは『古今和歌集』のなかにある伊勢の「久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる」という和歌を踏まえていると指摘されている<sup>12</sup>が、紫式部はさらに、桂と月の関係性を利用して、山里の霧を晴らすありがたい光に譬えて帝の行幸を誘っている。式部は「月中有桂」の伝説と桂という地名との関連を巧妙に使って、高度に知的なやりとりを作り出しているのである。そして、「月中有桂」という神仙伝の取り入れは、この場面でも雅趣を濃く漂わせる効果もあげているように感じられる。

ただ、道教思想が作品の中で重要な役を荷っているとはいっても、当時の日本人は作者も含めて、必ずしも道教と仏教の思想をはっきりと区別して考えてはいなかったようである。それを示す例としては、仙境的な場所が仏教の理想的な世界として語られた若紫の巻の北山をあげることができる。

源氏は瘡病の治療のため、名高い北山の「なにがし寺」にいる聖を訪ね、五人の従者を連れて山の中に入る。その場面は次のように語られている。

<sup>11</sup> 阿部秋生他校注・訳『源氏物語』(2) (『日本古典文学全集』 小学館 昭和47年1月初版 昭和56年6月第十一版) p. 409 頭注を参照

<sup>12</sup> 注11同掲書 p. 410 頭注参照

やや深く入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花、さかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、ところせき御身にて、めづらしう思されけり。寺のさまもいとあはれなり。峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りみたりける。(『源氏物語』(1) p. 273-274)

もう「三月」の「つごもり」になったが、人里離れた山の中であるため、山の桜はまだ「さかり」に咲いていて「霞のたたずまいをかしう見」える、と語られる北山には、仙境的な趣が漂っている。しかし、ここは神仙郷ではなく、「なにがし寺」の所在である。又、「峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りみたりける」というところは『遊仙窟』の次の一節を想起させる。

行至一所。險峻非常。向上則有青壁萬尋。直下則有碧潭千仞。

古老相傳云：「此是神仙窟也」

だが、ここで「深き岩」の中にいるのは、神仙ではなく「聖」である。四書五経などの儒教の典籍によると、聖とは、もともと堯、舜、禹、湯、文王、武王などのような、高い仁徳を身に付け、知恵の優れた人のことを指して言う言葉であった。また、道教の『老子』の中にも「聖人無常心、以百姓心為心」とある。即ち、「我」を捨てて、たえず「百姓」の福祉を念ずる無私無欲な仁徳者を指す。いってみれば、いずれも理想的な人格者のことを「聖」と称しているのである。そして、仏教が漢代に中国に伝わった時、中国の漢字文化はすでに高度の発達を遂げていたため、漢訳の仏教関係の経典などの中でも、自然に徳が高く、知恵の優れた僧のことを聖と称することとなった。それがさらに、漢字文化の受容とともに日本に伝わったため、日本の文学などでも高僧のことを聖と呼ぶようになったのであろう。この聖も高僧の意味として使われている。即ち、神仙窟を思わせる北山にいるのは、神仙ではなく、高僧なのである。

さらに付け加えると、聖を訪ねていく途中で、源氏は、寺の中から風に乗って聞こえてくる懺法の声を「いと尊く」感じ、滝の音と

響き合うその声を耳にして煩惱の夢から醒めたような心持になる。これもまた、仏教的理想世界の色彩を強く漂わせる場面である。しかし、その続きには次のような一節がある。

明けゆく空は、いといたう霞みて、山の鳥ども、そこはかとなう囀りあひたり。名も知らぬ木草の花どもも、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、なやましさも紛れはてぬ。(『源氏物語』(1) p. 294)

これは『遊仙窟』などの神仙小説によく見られる景物であり、仙境的情趣を濃く漂わせている。いわば、作者は道教と仏教の思想が渾然となった境域に仏教的理想世界を現出させているのである。

一方、儒教思想も、人物造形などにおいて、重要な役割を果たしている。

桐壺の巻で、作者は高麗の相人をして、源氏の将来について「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相」とであると語らしめる。しかし、彼はその後臣籍に下り、父帝も母后もなくして後楯でもなく、須磨退去まで強いられる。彼が到底最初の予言通り「国の親」になれないと思われる。そこに作者は天人相関思想を導入するのである。須磨退去した翌春三月上巳の日、源氏は海辺で禊をして、八百よろづ神に自分の無実を訴える。すると、急に暴風雨が起きる。この暴風雨は、天が朱雀帝に失政を悟らせるための天変である。それだけではなく、「その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきこと多かり」とあるように、暴風雨が起きる前にも、既に様々な天変が起きている。又、桐壺帝の亡霊も登場させ、朱雀帝を戒める。それゆえ、朱雀帝は一連の異変がすべて源氏に対して不公平な処分をしたための天罰だと悟り、源氏を召還しようとする。だが、弘徽殿大后は依然として強硬な態度を崩さず、性格の弱い朱雀帝は母后を憚って赦免の宣旨を下せない。すると、天罰は一段と厳しくなり、疫病なども流行し、世の中は次第に不安な状態になり、大后の病情も重くなる一方である。さらに次の年になると、「内裏に御薬のこと

ありて、世の中さまざまにののしる」とあるように、天罰は次第に朱雀帝の身に及ぶ。帝の目の病気が悪化し、思うように国を治めることもできない。そこで、朱雀帝は東宮に帝位を譲ることにする。そして、摂政大臣の人選についてあれこれ考えをめぐらした結果、やはり源氏が一番ふさわしいと考え、ついに大後の意向を無視して、源氏を召還することを決めるのである。作者は天変によって天の意思を明らかにし、源氏を中央へ復帰させたということが出来る。

こうして、源氏の実の子が天皇に即位し、源氏自身も摂政大臣になって、世の中の趨勢は源氏に有利な方向へと傾いていく。しかし、冷泉帝は源氏が実の父であることを知らないがゆえに、源氏を臣下として仕えさせる。これが再び天変を引き起こすのである。薄雲の巻には、次のような記述がある。

その年、おほかた世の中騒がしくて、公さまにものさとししげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろくこと多くて、道々の勘文ども奉れるにも、あやしく世になべてならぬ事どもまじりたり。(『源氏物語』(2) p. 433)

天がしばしば天変をもって天子の失政を悟らせることは、人々もよく心得ている。ところが、今度の天変は一体天皇に何を悟らせようとしているのか、判然としない。源氏にだけは心当たりがあるが、冷泉帝に言うわけにはいかない。しかし、冷泉帝が知らなければ改めようもない。そのため、天罰が続き、藤壺中宮も世を去ってしまう。源氏の悲しみは言うに及ばず、冷泉帝も心細さがますばかりである。そこで、古くから藤壺中宮に近侍した聖僧がある決断をする。帝が事実を知らずに源氏を臣下として扱い続ければ、天罰が厳しくなる一方で、やがて帝の身に及ぶのではないかと案じて、ついに冷泉帝に出生の秘密を知らせるのである。事実を知った冷泉帝は、勿論そのまま源氏を臣下として扱うことができず、源氏に譲位しようとする。だが、それは叶わず、藤裏葉の巻でその償いとして源氏を准太上天皇の位を就かせる。高麗の相人の予言通り、源氏は「国

の親」となったのである。この二回の天人相関思想の導入は、いわば源氏を最高位に就かせるために不可欠な装置だったとすることができよう。

また、理想的政治家としての源氏の造形にも、儒教思想の影響が大きい。まず、賢木の巻で、作者が源氏に「文王の子武王の弟」と口ずさませるところから、彼を周公のような理想の政治家として語ろうとする意図が窺える。また、源氏の才能は、桐壺院からも認められており、桐壺院は源氏を「齡のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさを憚りあるまじうなむ見たまふる。必ず世の中たもつべき相ある人なり」と評した遺言を朱雀帝に残す。桐壺院も源氏を世の政を執り行う器として見込んでいるのである。さらに朱雀帝も、東宮に帝位を譲る時、「朝廷」の「後見」役をあれこれ考えたあげくに、やはり源氏が一番適任だと考え、あえて弘徽殿大后の反対を押し切って彼を京へ召還する。そして彼の助けのもとで、冷泉帝の御代は世にも稀れな盛世となった。

こうして自他ともに認める大政治家となった源氏が、冷泉帝と朱雀院の行幸を六条院に迎えるのは、准太上天皇にのぼった年の十月二十日あまりのことである<sup>13</sup>。作者がこのことについて「世にめづらしくあり難きこと」と語るように、これ以上の光栄はありえない。作者がいかに源氏を特別な存在として描こうとしているかをここからも窺うことができる。そして、作者はさらに源氏の栄耀栄華を強調するために、宴酣の頃、太政大臣に次の和歌を詠ませている。

むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る  
 (『源氏物語』(3) p. 452)

中国でも日本でも紫雲は瑞兆とされているが、それは、盛徳の王が在位の時にしかたなびかないという儒教思想を踏まえている。「にごりなき世」とは、「聖王の治の行き届いた時代」、即ち、儒教的な

<sup>13</sup> 『河海抄』の註釈にはこの部分の語りは康保十一年(九六五年)十月二十三日の村上天皇の朱雀院行幸を準拠にしたとある(玉上琢弥編『紫明抄 河海抄』 角川書店 昭和43年) p. 455

理想世界を指し示していると考えてよい。そして、その言葉は、表面上は朱雀院、冷泉帝への賛辞であるが、作者の意図はむしろ、準太上天皇源氏礼讚にあったと見てよかろう。今上天皇冷泉帝の実父である源氏は、即位以来、冷泉帝の治世に公私ともにもっとも力尽した存在であり、冷泉帝の御代への称賛は、言うまでもなく、理想的な政治家としての源氏への称賛であると読者は解するはずである。作者は源氏に儒教的な意味での理想をその属性として付与しようとしていると考えてよかろう。

また、作者はどの時代にもこのような盛大な紅葉の賀が行われるとは限らないことを強調するために、さらに朱雀院に次のような歌で感慨を吐露させている。

秋をへて時雨ふりぬる里人もかかるもみちのをりをこそみね  
 (『源氏物語』(3) p. 453)

源氏の催した風流きわまる紅葉の賀への賛嘆の気持ちを表し、冷泉帝の治世を誉め称える歌と解してよかろう。「公」の面においては、理想的な政治家であり、「私」の面においては、情趣をよく解する魅力的な風流人である源氏の相貌をこの朱雀院の歌は表している。そして、作者の源氏に対する称賛は、彼個人に対してだけでなく、彼の周辺の人々にも及ぶ。

御容貌いよいよねびととのほりたまひて、ただ一つものと見え  
 させたまふを。中納言さぶらひたまふが、ことごとならぬこそ  
 めざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りま  
 さらん、あざやかにほはしきところは、添ひてさへ見ゆ。笛仕  
 うまつりたまふ、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶ  
 らふ中に、弁少将の声すぐれたり、なほさるべきにこそと見え  
 たる御仲らひなめり。(『源氏物語』(3) p. 454)

源氏一族(太政大臣一家も含む)は政治的に栄耀栄華をきわめるばかりでない。源氏はもとより、源氏の二子冷泉帝と中納言夕霧はともに容貌に優れており、夕霧はさらに笛の才能も有している。一族の中には、美貌、才能に恵まれた人物が多いのである。そして、

作者は藤裏葉の巻の最後に、源氏一族のまばゆいほどの繁栄について「さるべき」契りという評言を加えて第一部を語り終える。仏教思想の「宿世」論をここでも導入し、源氏一族の隆盛が因果の理法に適ったものであることを示して物語を締め括っているのである。

以上、『源氏物語』第一部の空間造形・人物造形を見てきた。儒教、仏教、道教の思想を織り込むことによって、理想的な世界及び理想的な人物像を作り上げようという作者の意図は明らかになったのではなかろうか。

#### 4. 結び

古代中国から日本に陸続と伝わった仏教、儒教、道教の思想は、平安時代に至って、次第に根をおろし、平安社会の日常的時空で重要な役割を荷うようになる。たとえば男女の婚姻や、幸も不幸も含めた人間の運命、あるいは愛する人との死別など、重大事との遭遇は、すべて仏教思想の「宿世」によるものと見なされる。又、社会の制度、言行の規範において、しだいに儒家思想が取り入れられ、子の親に対する「孝」行及び女性に対する「三従」の徳を要求されるようにもなった。さらに陰陽道でよく行われた物忌、方違、占ト、日時の吉凶などの作法も実は道教から来ており、『源氏物語』の作者はこのような仏教と道教と儒教が浸透した平安貴族社会の日常的時空を描き出している。そしてそればかりではなく、作者はこれらの思想を取り込んで、理想的な世界及び理想的な人物像を作り上げてもいる。仏教と道教思想の融合は、仙境的情趣の漂う仏教の理想世界を現出させ、また、儒教と道教の思想の取り入れは、源氏を「公」の面において理想的な政治家として描き、「私」の面において情趣をよく解する風流人として描出するのに不可欠な要素となっている。締め括りでもまた、仏教思想の「宿世」観が導入され、源氏一族の繁栄の必然性が語られるのである。以上の考察によって、仏教、儒教、道教思想が『源氏物語』の第一部の中で果した役割はやはり、見逃せないほど大きいことを確認することができたように思う。